歌よみと源氏物語

――六百番歌合判詞と岷江入楚――

小髙道子

藤原俊成が『六百番歌合』の判詞で「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記したことにより、『源氏物語』が歌人にとって必読書であったことが知られている。しかしながら「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」とするのは俊成の判詞の一部に過ぎない。細川幽斎が『耳底記』で語っている通り、中世の歌学者にとって歌合の判詞を検討することは極めて重要なことであった。本稿では岷江入楚「花宴」巻の注釈を検討することにより、当時の歌学者がどのようにこの判詞を理解していたかについて検証してみたい。なお煩を避くため、以下、書名の『　』を省略する。

一　六百番歌合[1]の判詞

「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記した俊成は、二条流の歌学者にとって、その言説が判断の基準にな

る重要な歌学者であった。一方、歌合について細川幽斎は「歌合ほど重宝なるものはあらじ」と烏丸光広に語っている。耳底記[2]には歌合について次の記述が見られる。

一幽斎伺候八条殿あり。曰、歌合ほど重宝なるものはあらじ。古人の批判を直ちにきく心なり。歌合といふ歌合にわが見ぬはなきなり。大かた見たるなり。（慶長三年九月九日）

一歌合ほどなる重宝はなきなり。むかしの人の口を直に聞く心なり。（同四年閏三月二五日）

一問、歌合見様の習候哉。

答云、別に習というてはなし。よき判者のをみる習なるべし。（同五月一日）

一歌合は六百番よきなり。千五百番もへんぱあり。（同五年五月四日）

歌合は「古人の批判」を知る事が出来る、歌学を学ぶ上で重要な資料であるが、「よき判者のをみる」のが「習」であり、「千五百番」歌合は偏頗なところがあるので「六百番」歌合が良いと幽斎は言う。幽斎から古今伝受を受けた歌学者でもある中院通勝は、岷江入楚に「故人此物語称美事」として俊成・定家の言葉を挙げる。

一　俊成卿六百番歌合判詞におよそ源氏の物語をみさらむ哥よみは無下のことなりと云々

一　定家卿云源氏物語は紫式部哥よみの程よりはものかく筆上手也　此物語をみれはそゝろにおもしろく哥もよくよまるゝとそ

[一花鳥余情の序にも我国至宝は源氏物語に過たるはなかるへし]

一俊成卿正治の奏聞状にも教長も清輔も源氏をみ候はす　ともにうたてきことに候也とのせられたり　尤和語の奥区なる物也

六百番歌合についてのこれらの記述を参照すると、通勝が六百番歌合の判詞を重視していたことが想定される。

まず、しばしば引用される六百番歌合の俊成の判詞を読み直してみよう。私にＡＢＣＤを付して該当部分を引用する。

（冬上）十三番　枯野　左勝　　女房

五〇五　見しあきをなににのこさむくさのはらひとへにかはる野辺の気色に

右　　隆信

五〇六　しもがれの野べのあはれを見ぬ人や秋の色にはこころとめけむ

右方申云、くさのはらききよからず、左方申云、右歌ふるめかし

判云、左、Ａなににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ、右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや、Ｂ紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、Ｃそのうへ花宴の巻はことにえんなる物なりＤ源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり、右、心詞あしくは見えざるにや、但、常の体なるべし、左歌宜し、勝と申すべし

俊成の「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」という判詞は、「くさのはら」という語が『源氏物語』「花宴」の場面を連想させることに気付かずに、「くさのはらききよからず」と難じた「右方」を「右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや」と批判した後で記されている。　この判詞について伊井春樹氏は「俊成の想念には光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」として、次のごとく記された。[3]

俊成は「草の原」のことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容している。つまり俊成の想念には光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催したのであり、それ故に良経の歌は優美なる姿を持っていると高く評価されるにいたったのである。そうすると俊成のようにこの歌を味わおうとすると、源

氏物語の美的情趣を持たなければおよそ鑑賞できないことになる。

俊成は「草の原」の「ことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容し」たのであろうか。また俊成が「花宴の巻はことにえんなる物なり」と記したのは「俊成の想念に」「光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」からであり、「俊成のようにこの歌を味わおうとすると、源氏物語の美的情趣を持たなければおよそ鑑賞できないことになる」のであろうか。ここで岷江入楚「花宴」巻の、俊成判詞を念頭に記されたと推定される部分を検討する。岷江入楚の引用は源氏物語古註釈叢刊により、源氏物語古注集成の番号で項目を示す。論述の都合上、引用箇所に私に通し番号を付し、古注集成の番号を（　）内に記した。

二　岷江入楚「花宴」巻

A　草の原

1（72）うき身よにやかて消なはたつねても草のはらをはとはしとやおもふ

俊成が「なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ」と記して「右方」を批判したのは、「くさのはら」の語が、源氏物語の和歌「うき身世にやかて消えなは尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」に見られるからであろう。この和歌、及び和歌に続く「と言ふさま、艶になまめきたり」について、新日本古典文学全集『源氏物語』（以下、全集と略す）は、次の解説を付す。

私がこの世から消えたとしたら、あなたは私の名を知らぬからとて、「草の原」（死後の魂のありか）を尋ねないつもりか、と問う歌。源氏が執拗に名を問うのに応じた歌だが、贈答歌としては、異例にも女の方から

詠みかけた贈歌。男に心を傾けてしまった女の、相手の情愛を確かめようとする表現。

源氏に心ひかれる気持が、優艶な表情として表れ出る趣

「源氏に心ひかれる」朧月夜が「贈答歌としては、異例にも女の方から詠みかけた贈歌」であり、「相手」すなわち源氏「の情愛を確かめようとする」和歌だと解釈されている。

これに対して岷江入楚は、「しきりに名を尋」ねることから「志」が「ふかゝらぬ」ことが「しられたる」という。なぜなら「真実の志ならはなき跡までも尋らるへき」であるから、という。そして、名を尋ねられたことに対して切返したこの和歌を「名答の作者也」と記している。

弄　此まゝはかなく消なは草の原までも尋給へき事なるに名のりし給へとあるはなのらすはたつね給ましきにやとかこちたる哥也　秘同

箋曰しきりに名を尋らるゝにて志のふかゝらぬはしられたる也　其ゆへは真実の志ならはなき跡までも尋らるへき也　今にかきるへきことかはと也　名答の作者也　なのらすは尋給ましきかと恨たる也河　弄秘箋大略同し義也

2（185）心いるかたならませは弓はりの月なき空にまよはましやは

岷江入楚は、185の和歌も、「草の原」の和歌と同様に、こうした源氏の「志」に対する不審を切返した和歌であると解釈した。そして「朧は天性哥よみ也」と朧月夜の和歌を高く評価している。

河（略）

花　比はやよひの廿日あまりなれはやう〳〵弓はりの月になる比也　まよふといふは心にいらぬ故にこそあ

れと源の哥の中の五文字にかゝりたる返哥也　弄同
秘　ふかく心に入たる事ならはたつねまとはさらましと也　前の哥のまとふ月といふにかゝりたる返哥也
朧は天性哥よみ也　弄同
聞書　此中の五文字にかゝりたるとかめやう前の草の原も同し様也　面白也
箋曰　真実心にいる事ならはたとる義は有ましき也　源のまとふ哉とあるをとかめてまとふとアルハうはの空なる心からと也　比は廿日あまり下弦の月也

「草の原」は、「死後の魂のありか」（全集注）という意味から離れて、源氏の言葉をとらえて切返した「草の原」を含む和歌を指す言葉になった。そして187の注では花鳥余情の「草の原をはとはしとや思ふといひし其人」という表現を引用している。

B　紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり

朧月夜の和歌に限らず花宴巻には、岷江入楚が高く評価する和歌が多いが、和歌ではない本文についても高く評価した項目が見られる。

3（149）外の散りなむとやをしへられたりけん
花　古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは哥の詞になき事をも心をとりてかくのことくかける也　定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り　いこま山いさむる花にみ

る雲のうきて思ひのたゆる日もなし　とよめるは本哥の雲なかくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかて心をとりていさむる花とよみ侍る也　こゝの詞に相似たるやうなれはよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也　大かた源氏なとを一見するは哥なとによまむ為也　よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいときなき人の為にしるしつけ侍る也

箋曰　みる人もなき山里の桜はな外の散りなむ後そさかまし　後そさかましといふは花にいひ教たると云義にてをさへて書也　定家卿い駒山いさむる峯にーー雲なかくしそと云はいさめたる心なれは如此用る也　此哥の取やう外のちりなんの引哥を手本と取やう也　已上花　已上箋

秘面白き書様也　古今の本哥に後そさかましとをしへたるをもて書たる詞也　花鳥にみえたり　弄同

私云　此取やう尤絶〻妙の事とそ　心を付へし〻（異同有り）

この「外の散りなむとやをしへられたりけん」という表現は、古今和歌集の「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」をもとにしたものであるが、古今集の和歌には「をしへ」という言葉はない。教えるという言葉は用いていないが、「花にいひをしへたる心」であるので、「哥の詞になき事をも心をとりてかくのことくかける」という。そしてこのように、本歌とする和歌の言葉にはない言葉を、和歌の意味を用いて詠むことの例として定家の「いこま山いさむるみねにゐる雲のうきて思ひはきゆる日もなし」（拾遺愚草二〇四六）を挙げる。この歌の本歌となった伊勢物語二十三段の和歌「君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも」（新古今和歌集一三六九）には「いさむる」という言葉はないが、「雲なかくしそ」というのは「雲をいさめ」た「心」であるので、「いさむる花」と詠んだというのである。そして、定家の和歌の多くは「此物語」すなわち源氏物語「より」出たという。源氏物語などを一見するのは歌などに詠むためで有り、詠むためには本歌

本説の用い方を知らなければならないので、書き付けたと花鳥余情は記している。そしてこの様な歌の取り方は、「外のちりなん」と記したこの源氏物語の本文を「手本」としていると、「花」「箋」が記していることを岷江入楚は指摘している。

また、花鳥余情の「古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは哥の詞になき事をも心をとりてかくのことくかける也」とする注記も注目される。花鳥余情は「外の散りなむとやをしへられたりけん」という源氏物語の表現について、古今和歌集の和歌には「をしへ」という「詞」は使われていないが、和歌には「花にいひをしへたる心」があるので、その「心」をとって、和歌の詞にはない「をしへ」という「詞」を使って「外の散りなむとやをしへられたりけん」と表現しても良いと記しているのである。和歌をとる際の、心と詞についての重要な注記であろう。この事について花鳥余情は「大かた源氏なとを一見するは哥なとによまむ為也　よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいときなき人の為にしるしつけ侍る也」と記す。こうした本歌本説の用い方も知る必要があるため、「いときなき人の為にしるしつけ」たという。ここで想起されるのが後鳥羽院御口伝に「源氏物語の歌の心をばとらず詞をとるは苦しからずと申しき」と記す口伝である。これはこの項目の逆であろう。この花鳥余情の注とあわせて考察すると、後鳥羽院御口伝は、「源氏物語の歌の心をばとらず」に源氏物語の「詞をとるは苦しからず」と理解する事ができよう。[4]

4（6）日いとよくはれて

源氏物語の本文を高く評価することは、6「日いとよくはれて」の注にも見られる。岷江入楚は「箋曰」（注末に「秘同」と記す）として次の注記が見られる

箋曰　威徳の世には天も与スル故に四美備る也　二月末の時節の景気宮中の有様上代の躰を思やりてみるへし　末代零落の眼にてたやすくこれをみば作者の粉骨もむなしかるへし　秘同

私云　前の紅葉賀の日は日くれかゝるほとにけしきはかりうちしくれとあり　此花宴には日いとくれはれてとかけり　いつれも時節に相応したる感を思ふへし。

「日」が「よくはれ」たのも「威徳の世には天も与スル故」であるという。そして「末代零落の眼にてたやすくこれをみば作者の粉骨もむなしかるへし」と「作者の粉骨」の表現に着目するよう記している。また「探韻賜りて文作りたまふ」時に、「宰相中将」が「春といふ文字賜れり」とあることについても、岷江入楚は「箋曰」として「御門栄華」と記している。

5（10）宰相中将春といふ文字

花　花のえんの詩に春といふ韻字はあひにあひたる事也　源氏君の栄花の春をおもひよせていへる也

箋曰　御門栄花の時節に逢ひぬる時を得て春字をさくりえられたる自然の幸也

なお、この巻が「二月の二十日あまり」と書き始められて、二月下旬の出来事であることは、注記で指摘されることがある。67「程なく明ゆく」の注には「春のみしかよのふけたるさま思ふへし」と春の短夜であることを指摘しているが、同じ項に全集は「官能の時間が一瞬のうちに過ぎ去る」と注を付す。

C　花宴の巻はことにえんなる物なり

D　源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり、

6（116）よにしらぬ心ちこそすれ有明の月の行衛を空にまかへて

「D源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」の語は、花宴巻では、116「よにしらぬ心ちこそすれ有明の月の行衛を空にまかへて」の注に見られるのみである。そこで、両者が記されているこの項目から検討する。まず、岷江入楚を引用する。

秘　源の哥の中にも秀逸也　五文字殊更妙也云々　花鳥に色〳〵あり　其評面白し　箋秘ノ義ヲ註ス略之

箋曰明はてゝよりは有明の月の行衛はいつくともしられさる也　まかへてとは行衛をうしなひたる心也　世にしらぬは忙然と是非をわきまへぬ心也　面は月をしたふ義也　下の心は朧月夜誰ともしらす其人ともわかぬはたとへは有明の月の行衛なきかことく也　此世にしらぬはかならすしも世の字の心にては有るましきやうに申されし　よに逢坂の関はゆるさしの哥のたくひにそ申されし

花吉水僧正の哥　有明の月の行衛をなかめてそ野寺のかねは聞へかりける　此哥をとりてよみ侍る也　源氏をは詞をも哥をもとりてよむへき也　俊成卿も源氏みさらん哥よみは無念の事といへり　又花宴巻はことにすくれて艶なる巻なりとも申給へり

「秘」は、この和歌が「源の哥の中にも秀逸」であり、特に「五文字殊更妙也」という。「花鳥に色〳〵あり　其評面白し」と記しているから、この項目の末尾に記した花鳥余情の記事は、「秘」から引用したのではなく、花鳥余情についての「秘」の記事をもとに、改めて確認して引用したものと推定される。そして、花鳥余情と比較すると、この和歌について岷江入楚は花鳥余情をそのまま引用していることがわかる。すると、この和歌について「源の哥の中にも秀逸也　五文字殊更妙也云々」とするのは「秘」すなわち公条説であり、吉水僧正の和歌を引き、「源氏をは詞をも哥をもとりてよむへき也　俊成卿も源氏みさらん哥よみは無念の事といへり　又花宴巻

はことにすくれて艶なる巻なりとも申給へり」とする部分は花鳥余情で指摘された説を継承したことになる。こうしたことから「秘」は「花」「河」として岷江入楚が引用する花鳥余情・河海抄については参照していることを前提にして作られており、岷江入楚は花鳥余情・河海抄を参照して「秘」説を継承したことがわかる。そのため「秘」は、その説に対する評価を記す時以外は花鳥余情・河海抄の説を引用しないのであろう。この項目について細流抄・明星抄は岷江入楚が「秘」として記す注記をそのまま記し、花鳥余情を引用することをしていない。これまで細流抄・明星抄に見られない「秘」説については、細流抄・明星抄の成立以後に公条が増補したと推定されてきた。しかしながら、岷江入楚がはじめに花鳥余情・河海抄を引用して、そこに記されている注記を前提にして「秘」説を継承したとすると、花鳥余情・河海抄に記された説は三条西家において継承された説であるにもかかわらず、「秘」には記されていないことになる。花鳥余情・河海抄を引用した注記における細流抄・明星抄と「秘」説との関係については再検討する必要があろう。

7（187）ことうれしき物から

花　草の原をはとはしとや思ふといひし其人の声とは聞きなせり　うれしきものからの結語おもしろく書なせり　かつ〳〵うれしくはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり

箋曰　花に草の原の君そと凡は聞なしたれとも六君にや又もし別人にやたしかに知給はぬ心云々　花説さも有ぬへし　此結語誠に物語の眼也　源氏の心にあくかれて有明の行衛を尋知たき心なれは此時其人とたしかに知ぬるは本意のうへの本望也　されとも女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に浅く思給よし也　源氏の性万事においてかくのことし　眼を付へし

秘　花鳥説面白し　但師説此結語は返哥をし給事はうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかろ〳〵しとおほしたる也　是源氏の姓也　いつくにも此心あり

弄尋あひたるはうれしけれとも女の返事すへき事のさまは然へからすと思ひ給心あれは物からといひのこしたり　是又源の性也　花鳥の説も其故あるにや　五六の間未分明云々　此外心あり　いつれも面白歟　此時のさまうれしけれとも猶あちきなく物思ひなるへき古今伝受路をこめて物からといへるにや云々　感あるにや

聞書にはうれしき物からかろ〳〵しきと也

箋聞には五六君未分明事云々

さて箋聞にも青表紙の義退而思ふ時はかろ〳〵しきか難なると也　師説云々

私云　うれしき物はかろ〳〵しきか正説也　花に五六分明ならぬと弄ノ義ニいよ〳〵物思ひのますと云は異説也　然ともいつれも面白しと心得へし

箋秘　凡源氏物語の中にも此巻すくれたると也　六百番判にも紫式部は哥よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の宴の巻はことに艶なる物也云々

巻尾に記されたこの注にも、俊成の判詞が引用される。花鳥余情をはじめとする岷江入楚が継承した古注は、俊成の判詞を念頭に置いてこの巻を解釈しようとしたのであろう。「草の原」の和歌を詠んだ朧月夜を「天性の歌人」であると表現し、俊成の判詞を念頭に置いたとみられる和歌の詠み方、本歌の取り方、和歌以外の文章の書き方についての注記が多く見られる。古注は俊成が「艶」と表現した言葉の根拠を、男女の情愛ではなく、和歌や文章の表現方法に見いだそうとしたのであろう。

三　源氏作例秘訣

花宴巻は、俊成に「ことにえんなる物なり」と評価されたためであろうか。花宴巻をもとにした和歌が多く詠まれている。浅田徹氏は「源氏物語と和歌」研究会代表として、研究会が翻刻された『源氏作例秘訣』の解題を執筆された。[5] 解題で浅田氏は「巻ごとの場面数と作例歌数」の一覧を作成されて「一見してわかるのは、最初の方に著しく集中していることである」とされた。氏の一覧によると、歌数が一番多いのは帚木の112首であるが、二番目は花宴の67首である。決して長い巻ではない花宴巻に作例歌数が多いのは、俊成判詞の影響があるのではないだろうか。次に67首の内訳を検討してみたい。

作例秘訣にに引用された作者別の和歌数について、浅田氏は伊井春樹氏の論を紹介した上で「『秘訣』の作者名は必ずしも正しくはなく、もし、それを訂正すればこの数字は変動しなくてはならない」とされた。そこで、浅田氏が引用された歌人別の作例数を、同書の索引により数字を変更して挙げる。その際、参考のために、花宴巻の歌数を括弧内に記す。

三条西実隆　二百二十一（6）
後柏原院　九十九（5）
藤原定家　四十五（4）
後水尾院　二十八（2）

中院通茂　十五（2）
烏丸光広　十七（2）
後西院　十八（0）
道晃　十五（2）
冷泉為尹　十五（1）
冷泉政為　十四（2）
藤原家隆　十三（0）
霊元院　十一（0）
中院通村　十一（3）
藤原為家　十（0）

この一覧から、花宴で引かれている和歌の数は、必ずしも源氏物語全体とは比例しないことがわかる。全体で十八首が引用される後西院の和歌は、花宴巻では見られない。藤原家隆・霊元院・藤原為家も同様である。逆に全体では十首未満しか引用されないにもかかわらず、花宴巻に複数の和歌が引用されている歌人もいる。

細川幽斎　九（3）
肖柏　六（2）
後鳥羽院　三（2）
源家長　二（2）

その他、全体では十首に満たないものの、花宴に和歌が引用される歌人に長明・頓阿・良経・基家・清水谷実業などがいる。花宴巻における作例と歌人については、俊成判詞の享受の面からも注目されよう。

本稿では、俊成の判詞のおおよその位置付を試みるために、岷江入楚の注記は肩付に限らず岷江入楚として一括し、俊成の判詞に直接は関わる注記に限って検討した。他の注記や、岷江入楚以外の注釈書との関係については稿改めて検討を加えたい。

注

（1）引用は新編国歌大観による。

（2）引用は歌学大系による。

（3）源氏物語注釈史の研究

（4）後鳥羽院御口伝の「歌の心をばとらず詞をとる」については「『源氏物語』と和歌」（中京大学国際教養学部論叢　平25・9）で検討した。

（5）以下『源氏作例秘訣』の引用は同書による。また本項目については同書に負う所が大きい。

［付記］本稿をなすにあたって小林一彦氏に御助言を賜った。記して深謝申し上げる。